

デンタルダイヤモンド／2015. 9月号（中島副委員長 記）

○スペシャル・シンポジウム：長寿社会における“義歯とインプラントの共存”を考える （依田 泰、田中五郎、吉野浩一）

＊欠損補綴の選択肢としてはインプラント補綴や有床義歯あるいは両者の組み合わせが考えられる。超高齢化社会をむかえ、欠損形態や患者の年齢、健康状態など、さまざま事を考慮する必要があります。この特集では、義歯とインプラントの共存にスポットをあて、補綴方法の選択基準や共存・移行の考え方を検討しています。インプラント＋ヒーリングキャップでオーバーデンチャーなど、興味深い内容ですが、結論は「残存歯を守るインプラントと義歯であり、お互いの役割を果たすための共存を目指さなくていけない」と抽象的です。

○Do.うがい薬エビデンスセミナー：術後感染予防のための含嗽剤を再考する（竹中彰治 興地隆史）

＊含嗽剤は洗口薬と違い、積極的な術後感染予防を期待して用いられる。含嗽剤はその効能から四つに分類される。口腔内の消毒、抜歯創の感染予防の効能で用いられるベンゼトニウム塩化物、感染予防の効能のポビドンヨード、抗炎症作用のアズレンスルホン酸ナトリウム、う蝕予防・歯質強化のフッ化ナトリウムです。この中でベンゼトニウム塩酸塩が主成分のネオステリングリーンはアナフィラキシーや創傷の異常治癒がなく安心して使用できる薬剤であるが、この類の殺菌成分はある程度の細胞毒性を示すので、長期の継続使用や原液での使用は避けるべきである。医科では創傷部の消毒は不要であるという考えが主流になっているが、エビデンスはないが、経験的に口腔内環境では含嗽剤の抗菌作用のメリットが細胞毒性のデメリットを上回っていると期待できるとしている。是非知っておきたい内容です。

歯界展望／2015. 9月号（小野委員長 記）

○特別企画 ～在宅での‘食べる’を支える～

在宅患者への摂食嚥下支援と‘菌回収’を意識した口腔ケア

菊谷 武 友友たかね（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック）

＊今年、岡山県で開催された中国地区歯科医学大会の講師だった菊谷先生の投稿である。在宅医療の話に興味深く講演し、目から鱗の視点で会員を驚かせたあの菊谷先生である。今回も在宅診療を診断から始めることの重要性を述べ、口腔ケアを‘菌回収’と表現し詳しく図解しながら解説している。

○特集／フルジルコニアクラウン調整から装着まで～

尾立哲郎 吉田圭一 平曜輔 澤瀬隆 （長崎大学大学院医歯薬学総合研究科）

＊本企画では、調整の最初の項目が「研磨の重要性」である。ジルコニアクラウンを臨床応用するうえでいかに研磨が大切であるかを一般臨床家に訴えたいものと思われる。逆を解せば気を付けないと、対合歯を摩耗させてしまうことの危険があるという注意喚起である。また装着時の具体的手順についても詳しく写真入りで解説している。最新の材料が最良の材料となるように一読をおすすめする特集である。

ザ・クインテッセンス／2015. 9月号（岡崎副委員長 記）

○Minimal Tooth Movement Part2 TADsを応用したMTM（月星陽介 月星大介 月星光博）

＊TADsとはTemporary Anchorage Devicesの略で、定義は「固定源となる歯を支持もしくは固定源の代わりになることで、矯正的固定源を強める用途として一時的に用いる装置」とされ、一般名称は「歯科矯正用アンカースクリュー」である。TADsを利用することにより困難なMTMの圧下が比較的短期間で予知性をもって可能になった。歯周治療において環境の整備という観点から、さらには補綴前処置として今後MTMが必要とされるケースが増えるが“動かない固定源”としての有用性は大きい。筆者が12年ぶりに新しく追補する事項として『MTM Part2』と題して寄稿したものである。

○イラストで学ぶ歯周組織再生療法／再生の3原則を踏まえた対応の実際（大川敏生）

＊歯周組織再生療法において再生の3原則は①スペースの確保②血餅の維持安定③創傷部の保護である。そしてこれらを確実に実践するには、歯周組織の状態と骨欠損形態に応じたアプローチがポイントになる。3つの症例で術前診査として軟組織では、歯肉の厚み、歯間乳頭幅、歯肉退縮、歯肉の陥凹の状態、硬組織では骨欠損形態と位置などを評価してそれに応じた切開デザインやフラップデザイン、縫合方法の選択を行っている。筆者の作成したディメンジョンツリーをはじめとする明快な治療戦略と縫合手順から使用器具に至る詳しい解説は歯科治療への真摯な取り組みでもある。

歯科評論／2015. 9月号（居樹副委員長 記）

○特集／MTAの臨床—生体材料としての現状と展望（興地隆史 村松 敬 他）

＊MTA（mineral trioxide aggregate）使ってますか。我が国では「歯科用覆髄材料」として薬事承認されています。従来の水酸化カルシウム製剤を多くの点で上回るという評価を確立されていて、覆髄だけでなく逆根管充填や穿孔封鎖など様々な用途に使われ始めています。生体材料としてMTAがどう優れているのか様々なデータより検証し、どのように臨床に応用していくのかを示しています。これから進歩していくMTAに注目です！

○新連載／「食べる」を最期まで支える口腔ケア—これならわかる！ 始められる！

開業医のための口腔ケア実践のポイント 第1回 口腔ケアの新しい潮流を知ろう

～開業医がなぜ「口腔ケア」を知らないといけないの？～（渡部 守）

＊超高齢化社会を迎え、介護の現場では口腔ケアに対する期待がどんどん高まっています。しかし口腔ケアと聞いてなんとなく苦手意識を持っているみなさんも多いのではないのでしょうか。本連載はそういった先生方に、開業医として知っておかないといけない口腔ケアのテクニック、介護者への指導の仕方などを解説していくものです。是非この機会に口腔ケアをしっかりと学ぶことをお勧めします。